

—壯にして學べば

神渡 小泉純一郎首相が国会でしばしば佐藤一斎に言及されたことから、最近とみに佐藤一斎の評価が高まっています。

前原 ありがたいことですね。

神渡 去年の五月二十九日、小泉首相は衆議院本会議での教育改革関連三法案の審議の席上、「少くして學べば死む」として為すことあり。壯にして學べば老いて衰えず。老にして學べば死むて朽ちず」という「言志四録」(「言志後録」「言志晩録」「言志鑑録」)の全四巻を総称したもの)の「三學戒」に言及されたことから、「言志四録」とは何だと一躍脚光を浴びました。

あの小泉首相の発言を梶原拓哉、岩村町長が岩村町歴史資料館に届けたらどうかと提案されました。それで九月六日に、前田さん以下十二名の方々が首相官邸に拠本を持って行かれて、小泉首相は大変感激されたそうです。折から佐藤一斎の座像を建てる事になっていたので、その銘板を書いていただきようお願いしたところ、快諾されました。佐藤一

前原 金

佐友生命総合研究所会長



まえら・かねいち 暁和19年岐阜県生まれ。41年東京大学医学部卒業後、住友生命保険相互会社入社。45年(47年)経済企画官経済研究所へ出向。58年山梨文部長。61年奈良文部長。63年同厚生省医師部長。平成2年財務部長。3年企画調査部長。4年取締役企画調査部長。6年取締役金融法人部長。8年常務取締役。9年常務取締役会員法人事部長。10年住友生命総合研究所社長就任。14年会長。現在に至る。立命館大学法学部客員教授、経済同友会幹事。著書に『21世紀の生命保険産業』(金融財政事情研究会刊)などがある。

○対談○前原金一VS神渡良平

佐 藤 一 斎

「**言志四録**」に學べ

神 渡 良 平



幕末から明治維新にかけて、新しい日本を築いた指導者たちに多大な影響を与えた佐藤一斎。近年は、小泉純一郎首相の発言によって一躍注目を浴びるようになった。

その教えは心ある指導者たちの精神的な支柱として今日まで脈々と受け継がれている。

佐藤一斎を信奉するお二人に、「言志四録」から学んだ心魂に響く言葉の数々を伺つた。

前原 ああ、そうですか。全國から大勢の人が来られるんでしょうね。

神渡 言志祭には例年四百名余り来ておられます。今年は佐藤一斎翁座幕式が岩村町歴史資料館の前庭で行われます。

前原 ああ、そうですね。今年の十月二十六日の言志祭で、その座像の除幕式も行われるので、七、八百名になるのではないかと想う。

岩村町は中央本線の忠那から明智鉄道で四駅目にある山間の静かな町です。開発の手が伸びなかつたので、古い町並みが残つており、「人間学の里」として訪れる人も増えているようです。

前原 あそこには日本三大山城の一つ、岩村城があります。いつも森がかかるので、別名森ヶ城とも呼ばれます。岩村町は山間の静かな町です。

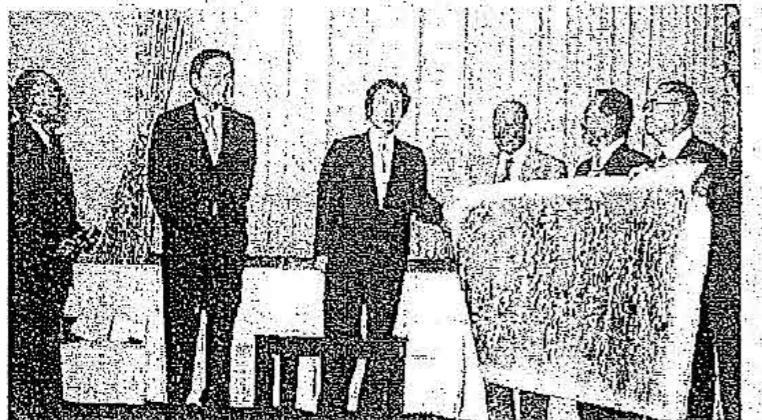
神渡 小泉首相といえど、外務官僚を扱いかねてぎくしやくして、いた田中真紀子前外相に、小泉首相が佐藤一斎の「重職心得簡条」を渡されたことで、マスコミの話題になりました。あれは前原会長が一枚かんでいらっしゃる

とお聞きしましたが……

前原 そのことがお耳に入つておられましたか。そのときはこういうこ

とです。実は僕は人生では三十数年前、安岡正篤先生の社内講演の時に作成した「重職心得簡条」の小冊子を幹部社

員教育用に作つておりました。ところが、私が本社の役員をしている時に、ダンボール箱いっぱい残つていた在庫



佐藤一斎顕彰会の人たちによって『言志四錄』の「三字戒」の拓本が小泉首相に届けられた

名譽会長には心から感謝しています。佐藤一斎の『言志四錄』を読み始めたのも、ちょうどその頃からでした。それに佐藤一斎が仕えた岩村藩（岐阜県恵那郡）は、私の郷里の多治見のすぐ近くなんですね。高等學校の校区は岩村と一緒でしたから、後輩には岩村出身者が何人かいます。それで余計

神渡 私のきっかけも、実は安岡先生に親しみを感じて、何度も何度も読むようになつたというのが、そもそも書籍が集まっている場所としては、全国一です。そこに佐藤一斎のこういう書が掲げてありました。

佐藤一斎の『言志四錄』を読み始めたのも、ちょうどその頃からでした。

だから、安岡先生に恩返しができたよ

とても近い方で、總理にも差し上げた。ついでにこういうものがありますよと、「重職心得箇条」の小冊子を差し上げたんです。そうしたらその方は小泉首相と言われ、それで差し上げました。

おそらく小泉首相は以前からこれを読んでおられたと思います。たまたま田中前外相に読みなさいと渡されたことがマスコミで報道され、その講演内容を単行本にした『佐藤一斎「重職心得箇条」を読む』（安岡正篤著、致知出版社刊）がベストセラーになったのですから、安岡先生に恩返しができています。

神渡 この秋、佐藤一斎の銅像が建つ岩村町歴史資料館は佐藤一斎関係の資料が集まっている場所としては、全国一です。そこに佐藤一斎のこういう書が掲げてありました。

生なんですよ。脳梗塞で倒れて、闊病（くわびょう）生活を送っている時に安岡先生の本を通じて『言志四錄』というのがあることを知り、それで読んでみると、これは天の道なり。君子の以（ゆ）す所（ところ）なり』（登夜急りなく天体が勉め運行しているのは天の道である。これと同様に「自ら

感動して、それから『言志四錄』に深入りしていくのです。

『論語』は歴史に残る不朽の書物ですが、私は次の二節によつて不朽の津と云ふべきがけです。

神渡 私のきっかけも、実は安岡先生がおっしゃった『志』ではないでしょうか。前原 いまの経営者たちに一番求められていたのは、いま神渡先生がおっしゃった『志』ではないでしょうか。

小泉一斎顕彰会の人たちによって『言志四錄』の「三字戒」の拓本が小泉首相に届けられた

（水は低きに集まつて溝をなし。果実は熟して自然とへタが落ちる。物事は道理に逆らつてはいけない。天下の大過を行ふことこそが肝要だ。）

実は、この書と同じ言葉が、安岡先生が東大阪市に建てられた成人教育研修所の講堂に掲げてあるんです。偉いな人物はみんな座標軸がぶれていません。前原 いまおっしゃった言葉は『言志後録』二条の『自ら贏めて怠まざるは天の道なり。君子の以（ゆ）す所（ところ）なり』（登夜急りなく天体が勉め運行しているのは天の道である。これと同様に「自ら

感動して、それから『言志四錄』に深入りしていくのです。

佐藤一斎（さとういつさい）安永元（1772年）岩村藩の豪農佐藤吉兵衛の次男として江戸城下の下屋敷で生まれる。名は昌（まさ）。大通（ひらき）と號す。34歳で木子学の宗家林家（の山家）の塾長となり、入學教練、重職心得箇条（じゅうしょくじつけい）を組み立てた。同年、下屋敷に当たつた55歳のとき、岩村藩主となつた松平義美の老臣に加えられ、重職心得箇条（じゅうしょくじつけい）を組み立てた。同年、下屋敷に当たつた55歳のとき、岩村藩主となつた松平義美の老臣に加えられ、重職心得箇条（じゅうしょくじつけい）を組み立てた。

（1841年）述（じく）が74歳で没（いた）る。70歳で幕府の『閑聊（かんりょう）』に就任（じじん）する。元治6年（1869年）没（いた）る。88歳。



小泉純一郎首相も倒さる幕末の創始者・佐藤一斎

勉（めん）めの怠（だま）いなのが君子の道である。に通じると思います。人の上に立つ者こそ、こうした座標軸をしっかりと持つことです。

前原 私が住友生命に入社した時の社長が、いまの新井正明名誉会長です。

それで入社以来非常に親しく新井社長から安岡正篤先生のお教えをご指導いただきました。私は大学でマルクス経済学を中心的に勉強した世代ですから。

最初の頃はとても抵抗がありました。

安岡先生の本を『読み』と言われるから、仕方なく字面を追つていただけで、心の中に全然入つてこないんですね。

ところが、三十代になつて課長になりました。支社長になつて、安岡先生の本を読み返してみると、今度はすこしと入って来るようになつたんですね。

神渡 ひと通り人生を経験し、人を使ふ立場になつてみると、響くものが

あります。

前原 なるほど、そうだと感じる。これが非常に多くなりました。いままで

は倦むことなくお導きくださった新井

の高底に表れるんですね。

前原 それはそうです。目標が低いこと、そのレベルに合わせた行動しかで

きかない。志を高く持って刻苦勉励していくと、それが積み重なつてそれなり

の人格になつていくんですね。

私が支社長になつたのは三十代の終わり頃でした。支社では、何百人の社員が「支社長さん、支社長さん」と

大事してくれます。しかも、人格面でも大変立派な半上のベテラン社員もたくさんいました。それだけに私は、

果たして私という人物はこうしてみんなから大事にされる値打ちがあるので

うかと悩みました。

どう考えても、その値打ちはないと思つた時、そうか、みんなが大事にしてくれるのは、私が学び、努力し、成長して、支社長としての使命をきちんと果たせるようになることを期待して

いるからだと思ったのです。それにはまだその実力はないわけですから、志

といふか目標を高く持つて、他の人の何倍も勉強しなければならない。そ

なると、佐藤先生のご著書とか、安岡先生の教えが、心に染み込んでくるよ

うになつたんですね。

そのことを『言志録』八十八条で「著眼高ければ、則ち理を見て較（か）せば」

つまり、できるだけ大所高所に目をつければ、道理が見えて、迷うことがない、とおっしゃっています。

神渡 私がその「著眼高ければ」の糸を改めて噛みしめたのは、伏見工

業高校のラグビー部の取材をした時で、山口良治監督が、あのまつたくの落ちこぼれ軍團を、日本一のチームにつくり上げたのは、目標をはつきり持って、その実現に向かって、来る日も来る日も努力したからでした。

前原 あの記事は私も読みました。読んでいて涙が出ました。

神渡 彼らは山口監督の指導によつて「日本一になるんだ」という目標設定をし、それに向かってチーム一丸となつた時、たやすく妥協しがちな自分の弱さが割り落とされ、目標に向かっていきました。目標をどこに設定するかで、人間の甘さを吹き切つていくことができるのがあります。

前原 そういう意味では、いいリーダーの存在というのは、大切ですね。前原やほり世の中が傾き縮まるものが、言志録の百二条には、そのことがこう書いてあります。

神渡 佐藤一斎は幕府唯一の学問所・昌平賛の儒官として、八十八歳で亡くなるまで、湯島で教鞭を執りました。門弟三千人といわれ、渡辺雅山、佐久間象山、安積良房、大橋訥庵、横井小楠、中村正直と鉢をなする人物ばかりです。それに佐久間象山の流れから、勝海舟、坂本竜馬、吉田松陰とかが出ていますから、幕末の人間たちの精神的なバックボーンになつたのが、この佐藤一斎だと育えます。



「人間のレベルは、その志の高低に表れます」



「いまの経営者に一番求められるのは志です」

より出する者と雖も、面も必ず致す所有。成湯之説に曰く、「爾多方の罪有るは子れ一人に在りと。人主たる者は、當に此の言を監みるべし」

（諺に「禍は下より起る」というのが、自分はこう思う。この諺は亡國の言であつて、人主をして誤つてこれを信じさせてはいけない」と。すべで禍は上より起るものである。下がら出した禍でも、また必ず上に立つ者が、働きかけて、そういうふうにさせるところのものである。殷の湯王の説に、「汝ら四方の國々の人民に罪悪があるのは、自分一人の責任である」とある。人主たるものは、まさにこの言を

より出する者と雖も、面も必ず致す企業のトップの記者会見などを見ていれば、罪有るは子れ一人に在りと。人主たる者は、當に此の言を監みるべし」

神渡 あの社長の記者会見をテレビニュースで見て、その程度の人物が社長をしていたのかと、みんながつかりしたんじゃないですか。

前原 みんな「部下が働かない」とか「自分の部下は能無しだ」と言うけど、本当は長が能無じなんですね。だから、いまの日本で一番大事なのは、

後が本当の志を持つことでしょう。

前原 最近、禪の本をいろいろ読んでいて思ひますが、道元やその他の

幕末の人間たちの精神的なバックボーン

神渡 あの社長の記者会見をテレビニュースで見て、その程度の人物が社長をしていたのかと、みんながつかりしたんじゃないですか。

前原 みんな「部下が働かない」とか「自分の部下は能無しだ」と言うけど、本当は長が能無じなんですね。だから、いまの日本で一番大事なのは、

後が本当の志を持つことでしょう。

前原 最近、禪の本をいろいろ読んでいて思ひますが、道元やその他の

幕末の人間たちの精神的なバックボーン

前原 最近、禪の本をいろいろ読んでいて思ひますが、道元やその他の

幕末の人間たちの精神的なバックボーン

卓越した師は、かなり若い時に悟りを開いておられますね。それに引き換え、われわれは五十いくつになつても、悟つているとは到底言い難い状態で生きています。

それら禪の師がその素晴らしい言葉を吐いたのはいくつの時だろうと考えると、たぶん二十代とか三十代、せいぜい四十代なんですね。生きるか死ぬかという修行をしたり、そういう生きざまをしてきたから、そういう言葉が吐けたのだと思います。

いまの世の中は豊かで、しかもわれわれは高度成長期に、すっと生きてきたいるから、練れていない。だから悟りもない。頭で分かったと思つてただけで、自分のものになつてないんです。その点、佐藤一斎先生は、若い頃から練り上げて練り上げて學問をされた。この『言志四録』は、『易經』から始まって老莊の思想まで、ほとんどが入つています。

神渡 そうですね。前原 幅広く学ばれていて、しかもそれを自分の血肉にまでしてしまつてゐる。現代人ではそういう人物は非常に少なくなつた。だから、どうして佐藤一斎のような人物が生まれたのかと言ふことは、非常に興味がありますね。

神渡 ただが目標になつてしまつたり、株価を上げることだけが目標になつてゐる。本当はそうじやないんですね。事業を通じて人をつくつたり、社会に貢献したりというほうが、本当は大事だと思つてゐます。

前原 ありまじだね。新井名誉会長はその筆頭ですけど、その後の何代かの社長も結構豪傑ほうという姿勢がありました。

神渡 住友グループのトップは、安岡先生がご存命の時には、毎月大阪に来ていただいて、ずっと勉強会をされていましたそうですね。

前原 その講演録の一つが「東洋思想十講」です。

神渡 いまは「人物を修める」と改題されて致知出版社から出版されていますね。致知出版社で最も売れているのがありました。ところが、最近はどう

つかり、できるだけ大所高所に目をつければ、道理が見えて、迷うことがない、とおっしゃっています。

神渡 佐藤一斎は昌平賛の儒官でしたから、もちろん朱子学を講義しましたが、その精神に非常に影響を受けたものは、陽明学でした。彼が書き残しているものを見ると、王陽明が語つて

——懼るるに足らず

前原 最近の経済界の動きを見ると、これが逆になっていて「後世の毀誉は万人あれども我行かん」というような、男子の氣概が表現されているように思ひます。

前原 最近の経済界の動きを見ると、これが逆になつていて「後世の毀誉は万人あれども我行かん」というような、

それが逆になつていて「後世の毀誉は万人あれども我行かん」というように思ひます。

前原 最近の経済界の動きを見ると、これが逆になつていて「後世の毀譽は万人あれども我行かん」というように思ひます。

前原 最近の経済界の動きを見ると、これが逆になつていて「後世の毀譽は万人あれども我行かん」というように思ひます。

前原 呂の経営者は自分を高めて、それで事業を繁榮させようという気概がありましたが、ところが、最近はどう

も見ていると、利益とか収益を上げるために、表面する組織運営をうまくや

うとか、日先のことによるとエネルギーを割き過ぎているんじやないかという気がします。いろいろな会社を見ていると、変化が激しいということもあるので

でしょうか、最近は長期計画をきちんと立てない会社が増えていますね。

企業の志、経営者の志というものを表明したものが長期計画だと思ふので

すが、長期計画を立てる会社が減っていますというのは、やはりいま日本の状態を表しているのではないで

しょうか。ですから、いまの不景氣を飯に乗越えたとしても、本当にいい状態にならぬかと、ちょっと疑問です。

私たちの世代の経営者の責任はとても重いと感じています。

一燈を掲げて

暗夜を行く

それを明治天皇に差し上げたところ、それをお読みになつて、「朕は再び朕が西郷を得たぞ」と呼ばれたといふのですね。西郷はある苦衷の中で打てば響くように「言志四録」を読んだのではないかと、この三つのどれかを経験しないと、本物の人物はできないことがあります。

前原 それは素晴らしい。荷何かの本で生きるか死ぬかの大病をするが西郷を得たぞ」と呼ばれたといふのですね。西郷はある苦衷の中で打てば響くように「言志四録」を読んだのではないかと、この三つのどれかを経験しないと、本物の人物はできないことがあります。

現代の日本では左遷ぐらは経験しませんけれど、大病も求めてするものではありませんし、西郷のように、厳しい状況の中で本気で自分が求めめて「言志四録」を読んだり、たぶん私は得るものはないで

たつて、非常に厳じることがあります。西郷は左遷されて島に流されてしまふ。西郷は左遷されて島に流さ

でしょう。

それに私ども住友グループは、「一隅を照らす」ということを大事にしてきました。入社するとまず元住友本社理

事だった田中良雄さんの本を渡されていました。私は若い頃、「一隅を照らす」ということを勉強致しました。

「一隅を照らす」ということを勉強致しました。私は若い頃、「一隅を照らす」というのは簡単なことだ、もつといつぱい照らせる人間になりたいと思つて

いました。ところが、だんだん年を取つてきて、長の立場になつてふと思つたんです。自分は本当に一隅を照らして

いるのではないかと、「一隅を照らす」といふことは簡単なことだ、もつといつぱい照らされていることのほうが多

いのではないかと、「一隅を照らす」といふことは自分自身が輝いていないとで

きませんから、本当に大変なことだな

と思ったのです。

神渡 山中良雄さんは、「私の願」とい

う詩を書き残しておられます。田中さん

の信条が結晶化したい詩です。

一隅を照らすもので私はありたい

私の受けもつ、「隅が」「どんなに」といふじめな／はかないものであつても／わるびれず／ひるます／いつものか

に／照らして行きたい」

私の处女作「安岡正篤の世界」の取材をして、いまの大企業の社長や

役員のほとんどが高度経済成長期を生きてきたサラリーマンですから、そういふ本当の苦しみをほとんどしていません。

私が含めて、いまの大企業の社長や

と向かい合つたから、人物が練り上げられていったんだと思うのです。

神渡 「言志四録」十三条の一燈を掲げて暗夜を行く、暗夜を闇うること

勿れ。只だ一燈を頼め」「提灯を掲げて暗い夜道を行く時、夜道が暗いなどと嘆いてみても始まらない。自分が掲げている提灯だけが頼りだ」の一章に

も心構えの持ち方が教えられますね。

前原 あれは、いい言葉ですね。右

左阿するな、信念を貫けということ

は少ないと、本物の人物はできないと

いたつて、非常に厳じることがあります。西郷は左遷されましたが、この言葉は少ないと、自分のものにはならない

書いてありますからね。こちらが真剣に求める心を持って、この言葉と対話しないと、自分のものにはならない

したんです。それで安岡先生の「一燈

照暗、万燈照國」という精神が、こういう形で住友の中に生きているのかと思つて、とても嬉しく思いました。

前原 最近はどういう新人教育をやつてあるかは知りませんけど、やはりああいう教育は大事ですね。その意味でちょっと心配なのは、心とか人格に対する教育力が落ちているのではないか

かということです。最近は資格を取らせるとか、技術を身につけるとか

対する教育力が落ちているのではないか

かというのに走り過ぎてしまつて、人格教育が少し弱くなつているように感じています。

いま考えれば、われわれの時代は人格教育が大半だつたような気がするんです。その当時は反対もしましだけ

れど、自分が年を取り、長のポストに就いた時にその時の教育が生きてきました

と思います。若い時は反対して安岡先生のご著書は頭だけで読んでいましたが、いまはそれが心の中にすこしこじつて入つてくるようになつた。熟成の時

期が必要なんですね。

天を相手にせず

人間の体の中に凝縮

前原 「老子」とか「莊子」に、「第一

等の人物は、天から学ぶ。その次に優れた人物は、書物から学ぶ。その後に優れた人物は、書物から学ぶ」というよう

なことが書いてあります。たとえば、「老子」の「天地萬物は、天から学ぶ。その次に優れた人物は、書物から学ぶ」というよう

な概念を失つてしまつたために、人間が非常に小ぶりになつてしまつましたね。法律に触れるとか触れないとか、

今期の利益がどうのこうのとか、ノルマが達成できなかどうかと、そんなことで追づかけ回されています。

神渡 非常にちっぽけな存在に自己限

定してしまつました。そういう意味では、私は佐藤「斎の『人間は天の人間である』という人間觀を持つことは、人間が尊しくならないための秘訣

ではないかと思います。これは「言志

前に座り、彼の問答とした日々を追体験しました。すると、西郷がその牢獄

の中で繰り返し読んだ書物の中に、「言志四録」があることに思い至りました。

前原 最近はどういう新人教育をやつてあるかは知りませんけど、やはりああいう教育は大事ですね。その意味でちょっと心配なのは、心とか人格に対する教育力が落ちているのではないか

かということがあります。最近は資格を取らせるとか、技術を身につけるとか

対する教育力が落ちているのではないか

かというのに走り過ぎてしまつて、人格教育が少し弱くなつているように感じています。

先ほど前原会長が人間というのは頑張らざれば、本當には学ばないとい

うことをおっしゃつてましたけど、お

そらく西郷はある三度目の島流しの牢獄の中で、「吾教、心を照らす」じやあ

りませんが、この「言志四録」に心を照らして、生死に直面するようなこ

とがなれば、本當には学ばないとい

うことをおっしゃつてましたけど、お

そらく西郷はある三度目の島流しの牢獄の中で、「吾教、心を照らす」じやあ

りませんが、この「言志四録」に心を照らして、生死に直面するようなこ

とがなれば、本當には学ばないとい

うことをおっしゃつてましたけど、お

そらく西郷はある三度目の島流しの牢獄の中で、「吾教、心を照らす」じやあ

りませんが、この「言志四録」に心を照らして、生死に直面するようなこ

とがなれば、本當には学ばないとい

うことをおっしゃつてましたけど、お

そらく西郷はある三度目の島流しの牢獄の中で、「吾教、心を照らす」じやあ

りませんが、この「言志四録」に心を照らして、生死に直面するようなこ

とがなれば、本當には学ばないとい

うことをおっしゃつてましたけど、お

そらく西郷はある三度目の島流しの牢獄の中で、「吾教、心を照らす」じやあ

りませんが、この「言志四録」に心を照らして、生死に直面するようなこ

化したものである。そのことを自覚しないと、人間がせせこましくなってしまいます」とおっしゃっていますね。

前原 このことは一人ひとりにあっても、人類全体にとつても、永遠の課題ですね。

日本という国は、世界で最も天地自然に恵まれた国でしょう。世界の先進国の中では、森林が七割以上残っている。

と雨が降っただけで大洪水が起こり、何百人、何千人の人が亡くなっています。何百人、何千人の人が亡くなっているのに、同じぐらいの雨が日本に降つても、ほとんど人は亡くならない。それだけ日本は自然に恵まれ、治山治水に優れているのに、自然の恩恵に無頓着な人が多い。でも、そんなに暢気に構えてばかりもいられないんですよ。これから人類は、あと何年ぐら生きられると思います?

神渡 さあ……。

前原 東大教授で、地球物理学者の松井孝典先生にお話を聞いたら、「地球は、決して上昇志向だけではないといふことです。例えば、こういう一節があります」

「胸に処る者は能く顕を見、顕に撫る者は晦を見す」

これは『言志後録』の六十四条にある一節で、「日の当たらない立場にある者には、日の当たる立場にいる者の運動がよく見える。日の当たる立場の者には不遇の者のことがよく見えない」ということです。例えば、「こういうことですね。人間というものは自分のことばかりで、自分が当たらない者がどういう苦衷を味わっているか、ということは、なかなか分からぬ。でも、それが分からぬと、本当の指導者にはなれない」ということを言おうとしているのですね。

前原 本当にそうですね。こういうことが分かっていたら、企業の不祥事の時に、「俺は寝ていないんだなどといふ社長の発言は出てこなかつたと思いませんね。

神渡 そこで一つ連想するのは、坂村真民先生の詩です。これは真民先生が、分かっていたらやるのですが、

とお聞きしたら、「いまのままいくと、千年がいいところでしょう」と言われる。しかし、環境を専門にやっている学者たちの中には、「それは無理。百年がいいところでしょう」と言う方もいます。百年というと、孫やひ孫の時代ですかから、これは差し迫った問題です。

いまはみんな血眼になつて、お金儲けだと何かと言っているけれど、もはや別の次元の人間のあり方というものを考えなければいけない時に来つたのではないかと思います。

神渡 自分たちの視座を変えないと、人類はもたないという時代が来つたんですね。前原春日大社の葉室宮司さんがよく言つておられますけど、この日本の豊かな天地自然や歴史から学んだり感じたりすることで、日本は二十一世紀の人類に大きく貢献することができるのではないかと、日本という国の人々は大好き貢献することができます。その存在は、單に経済が大きいというだけでなく、人類がより良く生きるという面で世界のためにもっと発信しなければならないことがたくさんあるのではないか。そのためにも先達の素晴らしい教えをもう一回学んで、足元をしつかりと見つめ直す必要があると思うのです。

足の裏から 光がれる

神渡 いま前原会長が足元を見つめ直そうじゃないかとおっしゃつた点が、実は私の再出発の原点だつなんです。

寝つきになつて、これからどうやって食べていつたらいいのか。元気な時ですら稼ぐのが大変だったのに、寝つきになつて、これからどうやって生

活していくかと暗澹とした気持ちになりました。だから、上をじ見るんじやなくて、自分の足元をじ見るんじやなくて、自分の足元から一隅を照らすと努力しようじゃないか」と諭してくださいました。

それまでの私は、人と自分を見比べてばかりいて、同僚よりも早く出世したいとか、有名になりたいとか、そんなことばかりを考え一喜一憂しているのですが、それでやつと吹き切れました。そうだ、自分の足元から開めていこうという気持ちは切り替えることができた時、やつと大地にしつかりと足をつけることができたんです。

そういう意味では、先達の言葉といふのは、非常に重要ですね。先達はよく人間を見ていらっしゃる。だから、ここぞというところをよく分かってい

て、その諭しが私たちの人生を復活させるのでしよう。

前原 安岡先生はいつも「困難にぶつかった時、その答えは古典の中にすばてある」とおっしゃっていました。

その通りだと思います。というのは、われわれがぶつかる困難というのは、ほんと過去の歴史の中で経験していることなんですね。その答えというか、解決の糸口というものはすべて、あります。それを含うように高まれば、レベルがそれに合つます。自分の

レベルが低ければ、單に頭の上をすくつと通り過ぎていくだけです。

神渡 その困難な状況の中で私はどうしたか、その人自身が身をもつて答えるを示さないといけないので、それを解説の糸口が擋めるし、自分のレベルが低い場合は、單に頭の上をすくつと通り過ぎていくだけです。

前原 『言志四録』を私が素晴らしい手書きで、佐藤一齋先生が学んだ中で入っていると、その人自身が身をもつて答えるを示さないといけないので、そのどうするかというヒントを、先達たちがいろいろ書き残してくれているんですね。

神渡 この『重職心得箇条』は佐藤一齋が五十一歳の時、岩村藩重職の時に書いたものだそうですね。はつとさ

の数多くの詩の中で、私が一番好きな詩ですが、読んでみたいと思います。

尊いのは 足の裏である

一生人に知られず 一生きたない處と接し

黙々として そを務めを果してゆく

足の裏が教えるもの しんみんよ

足の裏的な仕事をし 足の裏的な人間になれ

頭から 光がれる

まだまだだめ 頭ではなく

足の裏から 光が出る

そのような方こそ 本当に偉い人である

こういう詩を書いておられる真民先生も、おそらく暗いところにいる人の痛みが、分かっていたらやるのですが、

前原 いい詩ですね。足の裏といえば、『莊子』も「真人は踵で呼吸する」と言っています。通じるものがあるんじゃないでしょうか。

前原 私にとつて教えられることが多いです。

神渡 最後に『言志四録』の中で、特にお好きな言葉を一つと言われたら、どういう言葉を挙げられますか。

前原 私にとつて教えられることが多いです。

神渡 本当に忙しいので、ここでは『重職心得箇条』八条の「重職なるもの、勤向繁多と云ふ」上は恥べき事なり」で

す。これは大変大事なことだと思います。

実は自分で忙しがっている長が多いんですね。本当は長というものは、大事なことを決めるのが役目ですから、忙しくてはいけないし、それから勤向繁多で從業員のことが見えないと、あるいは世の中のことが見えなかつたら、これは長ではないわけです。私の自戒も込めて、この教えは大事だと思います。

前原 『言志四録』を作ります。

前原 簡潔ですけど、一つひとつ心

にぐさつときますね。ですから、これ

もやはり絶えず座右に置いて、何かが邪魔して頑固になる。だから、年を取つても非常に柔らかい素直な心で学べる人というのは素晴らしいですね。こういう言葉があるから、『言志四録』は座右の書になる。

前原 あまりにも盛りだくさんだから、西郷隆盛のように、自分が感じたところを書き抜いて座右に置いておいたらしいと思います。

神渡 それぞれの人が自分の『手抄言志録』を作るべきでしょうね。

うすると、おそらく年齢が進むにつれて、あるいはポストが上がつたり立場が変わるにつれて、その中から捨てる言葉も変わっていくかもしれない。それもまた自分の成長の糧になるのではないかでしょうか。そうありたいのですね。

前原 簡潔ですけど、一つひとつ心にぐさつときますね。ですから、これ

もやはり絶えず座右に置いて、何かが邪魔して頑固になる。だから、年を取つても非常に柔らかい素直な心で学べる人というのは素晴らしいですね。こういう言葉があるから、『言志四録』は座右の書になる。

前原 あまりにも盛りだくさんだから、西郷隆盛のように、自分が感じたところを書き抜いて座右に置いておいたらしいと思います。

神渡 それぞれの人が自分の『手抄言志録』を作るべきでしょうね。

うすると、おそらく年齢が進むにつれて、あるいはポストが上がつたり立場が変わるにつれて、その中から捨てる言葉も変わっていくかもしれない。それ

もまた自分の成長の糧になるのではないかでしょうか。そうありたいのですね。